

高島屋大阪店と戦後建築(界)を語る

ナビゲーター 太田隆信

JIA 近畿支部保存再生部会 5 月例会として太田氏をナビゲーターとし、氏が携わった高島屋大阪店の改装事例の現地見学と、その後の座談会に於いて坂倉事務所時代の逸話を中心に戦後建築(界)について語っていただいた記録です。

2024年5月21日 14時から17時 大阪高島屋現地と
カフェ英國屋会議室にて 記録文責は百合野

目次

登壇者

プロローグ

- ・西洋美術館建設時の思い出
- ・坂倉事務所の東京と大阪の違い
- ・塩野義製薬との関係
- ・竹中錬一さんの話

前川国男 坂倉準三 吉阪隆生
藤木忠善 西澤文隆
竹中錬一 大辻

本題

Part1 私と高島屋

- ・高島屋大阪店の三つの時代
- ・一番目の時代
- ・戦後引き上げてきて大阪に
- ・ダンスホール
- ・グランドフロアー（ニューブロードフロアー）平田定男
- ・大阪の街を俺より知っているやつは・・・
- ・坪単価
- ・ローズルーム
- ・三番目の時代 私の高島屋との付き合い
- ・そのころの坂倉事務所の仕事のやり方 久野節
- ・エスカレーターの設置秘話 坂田支店長 小林営業部長
- ・大食堂のかつ井
- ・平田構造事務所 平田定男
- ・設計料の話

古橋廣之進 橋詰四郎 岩本博行

Part2 せめぎあいの 建築界

- ・坂倉準三は村野藤吾どう思っていたか 佐々木 村野藤吾
- ・西澤文隆と村野藤吾の出会い 西澤文隆 上田実 大江宏 田中
- ・近鉄上六ターミナルビルの時 佐伯近鉄社長 金森 有井 北村
- ・近鉄モダンハウジングショウ 小川吉之助 山崎泰孝 東孝光
- ・浅野雅彦 松隈洋
- ・坂倉事務所のコートハウス 浅野雅彦 東孝光
- ・ちっちゃな事務所が頑張る
- ・大阪府庁コンペの時 菊竹清訓 黒川紀章
- ・南海球場 岩本博行 井上堯

Part3 往来の巴里

- ・パリでの人脈と坂倉の仕事

小島威彦 和辻哲郎 白洲次郎
左近司政三 左近充尚正
川勝堅一

エピローグ

- ・会館と名が付く建物は・・・

プロローグ

国立西洋美術館建設時の思い出

私が坂倉事務所に入って、秋に西洋美術館の現場に3ヶ月ぐらいお手伝いに行った。図面を現場で設計変更をやって、それを文部省の会計監査のために全部書類化しなきゃいけない。その書類の手伝いで、坂倉、前川、吉阪さんの図面のハンコをもらいにいかなければならない。それが楽しかったですね。

前川さんはハナからノータッチだった。設備と構造だけ引き受けて。国内では前川、坂倉だけど、コルビジェとの関係で言ったら、前川さんでも、坂倉さんにはもうぐうの音も出ない。そういう雰囲気だと思うんで、口出さないですよ。

吉阪さんは割合茶目っ気のある人で、図面をもっていくと、つまらんとこちょこちょこっと直すんだよ。“それはモデルロールで割付たとこなんですけど”と言うと、何か不思議そうな顔して、僕の顔見て。“でもこれおかしいでしょ。モデルロールであっても、おかしいところは手で直すんですよ。コルビジェもそうやってんですよ”って直す。

それを持って最後に坂倉先生のハンコをもらいに行くと、前川さんとはそういう関係は何もない。“吉阪さんはどこを直しましたか”、なんか二人がもう。坂倉さんはコルビジェ(全集全8巻)でいうとスイス学生会館の3巻(1934-38)。吉阪さんは5巻(1946-52)から6巻(1952-57)の人。全然受け取りかたが違うんですね。吉阪さんが何かやってると思うとムキになって直すわけです。“この方がいいでしょ”というわけです。僕が、“これは坂倉さん”と言ったらそれでいいじゃないですか”って言うと、それが気に入られました。

坂倉さんはいい意味で無邪気な方ですね。坂倉準三とあとは全部弟子という考え方が厳しかった。コルビジェの前に出るとみんなお弟子さんになっちゃうんで、その辺が面白かったですね。西洋美術館の仕事にちょっとだけ関わらせていただいたから、そういう体験ができたんだと思います。

坂倉事務所の東京と大阪の違い

割合大きな仕事を東京はやってる傾向があったんだけど、藤木(忠善)さんが設計してこれというのはあんまり残ってないんです。ただ彼は新宿の西口の基本設計を最初からやって、それで嫌気がさしてやめた。それは本人が活字¹にしておられます。

大阪とその辺雰囲気が全く違うんですよ。大阪の西澤文隆さんが良心的だったと思うんです。担当者がしっかりしてないと施主が逃げちゃう。特に住宅の設計なんかいつ建ってもよろしいというクライアントいないからね。西澤さんが一生懸命やってという形だと病気で休んだときに、施主の立場では他の人に頼むということにならざるを得ないわけです。そうなるって困るということもあって、とにかく担当者が一生懸命打ち合わせをしてるという形で。仕事のやり方が東京と大阪で違ったんで、大阪はやりやすかったですよ。

塩野義製薬の仕事

西澤さんと塩野さんとはまた複雑な関係でね、口挟まないけど西澤さんは塩野さんの仕事は全部自分がやらないかんという感じがあって。塩野家の出入りの大工さんみたいな感じのクライアントとの接し方をしておられた。塩野さん自身は設計事務所とお施主さんはそういうお付

き合いをしてはいかんという信念を持ってる。

西澤さんも塩野義の設計方針と坂倉のすり合わせをやらないかんということで、私より上の方が塩野さんの担当してたんですけど、こういうときは関係って難しいですね。特に僕の方が所長で上でも、昔から彼らが担当してたので、ある時塩野さんに出ていくと、君は何をしてたのかって大喧嘩になった。彼は議論好きな人で、私も好きなんで、他人が聞いたら喧嘩みたいになったんです。もう一回改めて二人でやるということで、気心がお互いに知っているみたいになった。

竹中錬一さんの話

その喧嘩したときにたまたま外へ出たら、錬一さん（当時の竹中工務店社長 竹中錬一）が障子の影にたって聞いてくれているんですよ。“僭越な話でございますが、うまくいかなようであれば、私がご一緒させていただきます”。私は“とにかく一回は塩野さんとの関係で喋らせてください”と。そしたら“わかりました”と言われてね。本当にいろいろなすごい方がいらっしゃる。

僕も神戸の博物館をやったとき(1980-1982)に、彼の竹中に入って最初の現場というご苦労談をいろいろ書いておられたんで、その話を聞きたいと思って、竹中錬一さんに直接秘書通じてもいかんで、僕は親しかった大辻さんに“竹中さんに説明してほしいんだけど”と言ったら、大辻さんが、“太田さんの話は原則的に何でも叶えてあげる主義なんですけど、この話はちょっと無理じゃないか”という。“絶対来てくれるように言うてよ”といていたたら、現場来てくれましたね。すごいのは、足を引きずってられたんですけど、車で来て、車を現場で乗り付けられないんですよ。たまたま屋上にいたら、もう一つ前の辻の車が見えないあ

たりに車止めて、大辻さんと二人で現場に歩いて来られる。何かそういう方なんだなという(話しです)。話はすごく面白かったです。日経の記者が竹中錬一さんの話がスクープ²できて喜ばれました。



写真- 1 高島屋大阪店見学会の様子
中央が太田氏

本題

Part1

高島屋大阪店の三つの時代

坂倉事務所と南海高島屋ビルとの関係というのは、三つの時代がありました。

最初の時代というのは、復興の時代ということです。戦争の復興の時代で、野球場からグランドフロアの仕事をさせていただいたときです。これは大体 1955 年ぐらいまでの話です。

二番目が、1955 年から 57 年まで南海会館の仕事をさせていただきました。

三番目が、57 年から 70 年万博の南海ビルの増床の時代というのがありまして、私担当させていただきました。

一番目の時代

野球場の仕事が最初だったんですが、野球場は 1950 年、戦後 5 年後にできてるんです。もちろん土地は国の持ってた土地(専売公社の跡地)。それで南海さんが建てられるわけですが、実際は土地の間

題か何かがあって、これは進駐軍(GHQ)の鶴の一声で、あそこに野球場を作れと、野球から戦後復興を初めよと。極めて政治的な話なんで、南にだけ野球を作るわけにはいかん、北にもちゃんとしたスポーツ施設を作れということで、扇町に大阪市民大プールができました。

二つの施設が同時にできたということでそのことから、戦前からでしょうけど、大阪は南北戦争という時代があったわけです。

イベントとしては50年に南海の方にはアメリカから野球チームがきて試合ができた。北の(大阪)プールでは、日米豪国際水泳大会というのがありまして、多分そのとき初めて古橋が負けたんかなって感じがします。常に南北という形で動いておりましたという話が一つございます。

野球場を作るという話で、プランニングは竹中工務店で岩本博行さん(1913-1991)が担当しておられた。

プランができたんだけど、エレベーションの段階で営業的に坂倉サイドから割り込んだような痕跡もあるんですが、南海さんの方でもいまいちやなという感じもあった。それで坂倉に絵を描かせてみようということで、出来上がったときは、南海と高島屋の合同設計といった形。ただこの段階南海さんの設計という中に、竹中さんでやられたのは全部入って南海の設計ということになる。

何が球場のプランニングで良かったのかわからないのですが、岩本さんの初仕事だったかもしれないんで、岩本さんは大変思い入れがあったようです。“あの仕事はとても良くできているんだ”みたいな話をしておられました。何とあの建物が1998年まで残ってたんです。今の駅のプラットフォームができたときもまだ建ってたんです。

写真を見ると³、向こうに幕府時代の蔵屋敷があったんだろうと思ってたんですが、今のナンナンの入口のオフィスビルが建ってる辺りにあって、思ったよりも距離が短かったんだと、びっくりした気がするんです。

戦後引き上げてきて大阪に

ご縁がありまして私はグランドフロアができるまでの高島屋の状態っていうのは、子供のときですけど、見ていろいろと知ってるんです。私が台湾で生まれて戦後引き上げてきて、和歌山は紀州田辺に上陸して、国鉄に乗って和歌山で降りて、和歌山市から南海電車で難波に入ったんです。

初めて見たのが南海ビル。そう言う、それ以前に大和川を超えたら大阪ですってな方もおられるかもしれませんが、ずっと寝てましたね。親父に起こされたら、南海のビルが建ってた。確かに火をかぶったのは間違いないと思うんですが、とりあえずコンコースも鉄骨のプラットフォームの屋根なんかも焼けた鉄板で覆われてました。一応、コンコースの形をして。ただ、どっか穴があいていたんでしょね、上を見たら、高島屋のビルが見えたんですが、そのままの形で立ってた。火をかぶったんやなと思ったのは、窓がすっぽんぽんであったり、板が貼ってあったりというのははっきりと見えた。そこから地下鉄に乗って大阪に入った。

ダンスホール

その後中学校に入ってから社会科の授業で百貨店の話を聞くので、本来は阪急にいくはずなんですが、多分、阪急はそういう教室みたいなスペースがなかったんだろうと思います。高島屋のグランドフロアの下の荒い木で囲った教室みたいな多分研修室だと思う。そこに僕たち中学生が座って百貨店の流通の話をいろいろ

ろ。その後でせっかく来たんだからということで、予感があったんですが、真昼間の誰もいない高島屋のダンスホール⁴を見せていただけました。

高島屋の仕事をすることになってから僕がダンスホールを見たというと、みんな信じないわけです。いろいろ話していると、ほんま知っているんだな。けども、その話は35年後の高島屋の方も、ダンスホールを直に知ってる方いらっしやなくて、私が一部分を使ってやってたというようなことも知ってたということです。

グランドフロアー（開業時名称は
ニューブロードフロアー⁵・1950年）

グランドフロアができたというのはちょうど中学校3年から高校1年の終わりぐらい。ちょうど駅のプラットフォーム改札のところで、心斎橋戎橋から来たお客さんを受け止めて、そこから先は駅ということ。その下は裏なんだ。

グランドフロアに行くのに、細い道を通り抜けていくと、ぱっと明るいところから開けてというような感じで。始めて全フロアの照明に蛍光灯を使った青白い感じで、外へ出たみたいな明るい感じがあったのを覚えております。手すりには、ジュラルミンが使われていた。

何でグランドフロアーの所が下がっているのか、よくわからないのですが、基礎は松杭なんです。松杭の長さでは二間が限度なんです。その松杭を打つために、掘ったんじゃないかと思うんです。松杭云々というのは平田先生（構造家平田定男）に教えてもらった話です。

全部コンコースの下を、売り場にしてしまえというのが当時としては大英断で、すごい売り場ができたんです。戦後、大阪の百貨店の復興の口火を、その仕事が切ったと思う。その頃は大阪の百

貨店は、高島屋が1人勝ちみたいな感じで売り場は広くなって、しかも広い売り場っていうのは珍しいからすごく良かった。子供心に見て、感じたのは、何か戦前に戻ったなというか、というのは華やかな感じってのは戦前しかないわけです。僕は昭和9年(1934年)生れで、かすかに華やかな戦前っていうのを覚えていて、戦前の感じになったみたいな印象があった。面積が広いからとにかく高島屋売れて、という時代があったわけです。

大阪の街をおれより知っているやつは・

その頃私はアルバイトで百貨店に、石鹸はお中元の花形商品だったので注文取りに、阪神間の百貨店を毎日夏休みと冬休みアルバイトで回ってましたね。結果的には昭和30年(1955年)前後にそうやって回ったというのは建築をやってる立場からすると、いい勉強になりました。大阪の街をおれより知っているやつはいない。ちょうど今の骨格ができる時だったのでいい時期だった。

坪単価

百貨店回っていて、高島屋は非常に居心地の良い売り場だった。なぜ居心地が良かったかって広いんですよ。広いわりにお客さんがあんまり入ってない。それで、ゆったりしてるので、注文取りに行って油を売るには高島屋が一番。大丸さんなんかはすごく混んでるので、立ってる余地がないんですよ。

その頃から当時の言葉で坪単価ということが言われ始めました。広いから売れるんじゃない駄目だ。坪当たりどれだけ売り上げがあるかを競わないかんということ。それでいくと、その頃大阪大丸が一番売れてるんだみたいな話があった。

高島屋さんもせっかく広げたけど、野球場の方が思ってたほど人が入らない。だから野球場の方から入ってくる動線が

いけなくて、何となく広いけど、広さに見合った売り上げがないなという話になった。

ローズルーム

ただ、高島屋としてはグランドフロアの中に、ローズルームという高級食堂がありまして、大衆食堂の方は7階にあったんです。このローズルームというのはどの程度高級であったかという、大阪では名門の南のロータリークラブの会場が高島屋のローズルームだと。南は百貨店の食堂しかロータリーやる会場がないという言い方もできるし、事実そういう雰囲気だった。それで車寄せのあたりも残ってまして、週に一回だけローズルームとかそういう形で使われてるような時代だったんです。

三番目の時代—私と高島屋との付き合い

だけど、このままではいかんと、何とか高島屋のグランドフロアなんかを活かすような大きな仕事をやらないかんという話。それには戎橋からダイレクトで入ってドカーンとグランドフロアへ抜けていくようなルートを作って、さらに南へ抜けていく、今のなんばCITYの方へ抜けていくというのが南海さんのグランドデザイン。

それを阪急さんで言うと、今の3番街抜けて、茶屋町のインターナショナルに抜けていくのと同じ。電鉄さんというのはそういうグランドデザインを持ってもらえる。

ただ、時間が経ってる阪急さんは行き着く先が既に出来ている。南海さんの場合はそこから先のもう一つのターミナルがないんです。ずっと抜けていって、大国町の交差点に抜けたらいいんじゃないか。大国町の交差点のところに木津の市場があって、それがいい形になればいい

んだけど、南港の中央市場があるので難しい。

結局、戎橋からドーンと入ってくるような道をつけないかんという話になります。その改装やるときに私が担当させていただき、10年近く高島屋さんとはお付き合いさせていただく事となったわけです。

そのころの坂倉事務所の仕事のやり方

その頃、事務所の仕事のやり方はある程度のプロジェクトともう一つ住宅の仕事をやらないかん、二本立て。間に住宅の仕事をせないかんという不文律があって、どっちが本業かわからん。高島屋の仕事が1960年に始まってんですけど、その頃までの僕のリストを見てみると、住宅を2、3軒竣工させてるんですけど、いずれも話題になった問題作⁶。個人住宅そのものはほとんどやってても儲からない。二つやる制度でいくと、大きな仕事で入ってくる設計料で僕の給料と外注費払って経費出るわけですよ。そういう環境で高島屋の仕事もやりだしていた。

窪添 坂倉が高島屋に入って、元設計者 久野節ですが、戦後は久野の姿はなかったのですか。

私がやり出した頃は全然ありませんでした。最初にグランドフロアの設計やったときにちょっとそういう話があっただけで、それ以降そういう話はなかった。多分高島屋さんなり南海さんの方で処理されたんだと思います。

エスカレーターの設置秘話

百貨店の仕事というのは、お中元とお歳暮は絶対避けないかんから、その辺は僕アルバイトで石鹸の注文とりやったんでよくわかる。お中元とお歳暮、お歳暮とお中元の間とどっちが長いかわから、後者の方が長いわけです。ですから後からエレベーターの付け替えでドーン

とグランドフロアへ抜ける仕事やって、その前にエスカレーターの付け替えをやりましょうという話になった。打ち合わせを始めたんです。

改装の仕事というのは、新築の仕事に比べると、迷路を手繰るみたいな仕事とか、知恵の輪みたいな、当てはめていく仕事があるんです。エレベーターの仕事を坂倉にと言ったときには企画はもう高島屋と南海で出来てました。あとはデザインしてください。

エスカレーターの取り替えなんていうのは、知恵の輪みたいなもので、限られたところで、限られた動きしかできないわけです。高島屋には工作所があって大きなエスカレーターをちゃんと作って、モデルがあるわけですよ。それを役員室に持ってきた。その頃(1960年頃)、大阪の支店長やってた坂田さんは坂倉事務所では怖がられた人なんですけど、彼が一生懸命それを動かして、ああでもないこうでもないやってるわけ。

私がそのときに、こういうふうにしたらという案を出した。それが今のエスカレーターの取り付けで二台正面に上っていく、今は3台になってる。それをこの柱とエレベーターの間の狭い隙間にエレベーターを取り付けた方がいいじゃないですか。みんな考えるんだけど入りそうなところが狭いんですね。

私は、大理石が貼ってありますので、大理石を剥がして、幅広くして、そこにエスカレーター入るやないか。コロンブスの卵みたいな提案をしたわけです。そしたら、坂田さんもさすがに信じがたい感じでね。早速営繕部長の“小林を呼べ”とか言って。“太田くんがこういうことを言うのとるけど、そんなことできるのか”と。大会社の部長らしく、“大理石が貼ってありますから無理じゃないですか”っていう。僕は“モルタルぬりにしたら幅が取れるから入るでしょう”。

ずっと考えててできないことを誰かがやったということになると面目ないんですよ。一人勝ちってのは大企業の人には嫌がるパターンだと思いますので、みんな寄ってたかって駄目という。だけどそこにエスカレーター入れる魅力の方が大きいということで太田案が通りました。

大食堂のかつ井

それ以来、こいつはできる奴やなという話になりましたね。非常に仕事がやりやすくなって、坂田常務も、直接“太田君”と呼びに来てくれて、その頃は携帯も何もない時代で他に打ち合わせに行っても、今すぐ来いって言うんですよ

“今打ち合わせして終わって、昼飯食べようと思ってるところで無理です”といったら、“今すぐ来い、昼飯ぐらい食わしてやる、お前の好物のかつ井準備しておくからすぐ来い”。ああいうところの秘書というのは、よくできた女の人で、ちょっとかわいらしくて。僕が行くと、大食堂でかつ井を持ってきたら、

“食べながら行こう”って言って食べながら打ち合わせをする感じになった。それで非常にやりやすくなってエスカレーターを壊して、今の大動脈を裏へ抜けていく形にした。

平田構造事務所

一番の立役者はやっぱし構造で、平田構造事務所の平田先生が、いろいろやってくださったんです。そのときに壊して作る場合の構造的な補強の考え方であるとか、それから撤去した場合、撤去した部分よりもちょっと多い目に補強せないかとかその辺りの構造のプリンスプルを教えていただけたのが、大きかったなという感じがいたしております。

設計料のはなし

そんなことがあって高島屋の仕事をいろいろご相談を受けるようになった。その

頃から物流が新しい配送センターという
か、配送の拠点作ってやり出す最初の状
態であった。

竹中さんでずっと
やってたんだけど、“太田君ちょっと見
てくれへんか”ということで、設計して
くれという話になった。それで坂倉とい
うのはいい意味でいい加減なところで、
よろしいおま、ってな感じで設計取りか
かった。その配送センターの設計料がず
いぶん安かったんです。それが坂倉さん
にわかって、坂倉さんはその頃から、
“こんな安い設計料は駄目だ。今から坂
田さんに会って、談判します。西澤君つ
いて来なさい”。

“僕もついて行きます”言うたら、
“いいでしょう来てください”ってこと
で、西澤さんと坂倉さんと私と3人で、
坂田さんのところに設計料の値上げのお
願いに行ったわけです。

坂倉さんと3人で入っていて、先生の
顔を見るなり、手を挙げて、“いや先生
この度ありがとうございます。設計を無理をお願い
したらちゃんと聞いていただけて申し訳
ない。この設計料は必ず払います”。坂
倉さん啞然としてしまって、うやむやの
内にさせていただく事になった。

帰りがけの車の中で私はそんなこと言
うはずはないんだけど、まさか坂田さん
がいい加減なことを嘘をつく訳もなし、
何か私の言った言葉が、そういうふう
に安くていいというようなOKのサインに
なったんでしょうかね、とさかんにぼや
いていた。なんでそうなったか僕は今でも
よくわかんないんですが、考えてみる
と、坂倉さんに設計頼むということで、
私がどんどん設計を進めて、やっぱ会社
だと担当者が設計を進めるというのは、
もうOKだ。会社がOKをしたから設計を
してるというように錯覚をしたかったん
か。僕自身はまだ営業的な仕事をして
いる段階で、西澤さんには言ってたんだ

ど、勝手に設計してたような感じになっ
てしまった。

多分もう設計してるから、坂倉さんが
OK出してるんやろうと思うって言うた
かなと思ったんです。何となくそんな経
緯がありまして、高島屋の仕事を私がや
っていくような形になりました。

窪添 その時の坂倉事務所の設計料率
ってどういう基準でしたか。

それがはっきり僕覚えてないんです
よ。

塩野義さんとの設計料率っていうのは
一つはっきりしてましてね。マンデーで
人件費を計算して、それに何掛けかして
もらうという形だった。それを塩野義方
式という形で女性の事務の方が計算す
る。

そういうふうにやりだすと、どうして
も設計事務所の立場よりも相手のペース
に飲まれてしまうんです。塩野義に有利
な形で設計料が決まってすごく設計が安
かったんですよ。具体的にどれだけ安か
ったか、それでもちゃんと維持して設計
を出してましたから設計事務所の設計料
が安かったのか、それともそうそうもら
ったのかその辺はよくわかりませんがそ
ういう形で設計をいただいていたんです

私はそれ非常に不満でしてね、設計料
ってのはそんなもんじゃなくて、後で私
がトップの方になって設計料の計算する
ときに、塩野義さんにかなりの金額をバ
ーンと出したんです。

佐々木さんが“こんなありえない。正
味形でいくとこれになる”というから、
“いや設計ってそんなもんじゃない、ギ
ャランティもらわなきゃ駄目だから、こ
れで出してください。駄目なら他の施主
を捜しますから出しなさい”って出した
ら通りました。

窪添 村野藤吾事務所の設計料の算定はなかなか独特で。施主が村野さんとかぶるじゃないですか。その当時の村野事務所時々もらわない仕事があるんです。調整するんかどうだったのかなんですけど。坂倉事務所がどのぐらいでやったのか。結構高かったイメージがあるんですがそうでもなかったということですね。

あの頃は設計料が全体的に安かったですからね。高いというイメージがあったかもしれませんが、後に出た設計料率からすると、安かったと思いますが。

Part2

坂倉準三(大田隆信)は村野藤吾をどう思っていたか

クライアントとの関係が面白いのは、坂倉先生が一番建築界でライバルという意味でも気にしてた人は誰かということだと、ほとんどの方、前川—坂倉という感じじゃないですか。坂倉先生が一番気にしてたのは村野さんなんです。全く不思議なんですけど、一番のお得意さんが全部村野さんとバッティングしてるんですよ。

まず古い順番でいくと、高島屋さんがそうですよ。高島屋さんは大阪は坂倉なんですけど、東京は村野さんが。出光さんが、ガソリンスタンドは坂倉がやって、目玉の本社直轄のガソリンスタンドは全部が村野さん。具体的に言うと九州がそうです。それから京都がそう。それから近鉄さん。坂倉は奈良。本社の上六は村野。それから阿倍野は村野さんだから。

村野—坂倉という差をつけられてる。これは非常に所員としては不愉快な感じでありました。

これはかっこつける訳じゃないけど、今の野球の大谷がワールドクラシックの

ときにね、アメリカと最後決勝やるときに、皆さんアメリカの野球の選手は、どなたも自分の憧れのスターとして感じておられるでしょうけども、今日だけは憧れの好きな選手という考え方をやめましょう。自分のライバルとして選手を見ましょう。ライバル同士の試合ですと言ったのを覚えておられますか。

テレビでもだいぶ流れましたけど。現役を離れた形になって、寂しいけども、テレビがたっぷり見られるようになったのはいいですね。テレビってすごいですよ。情報量なんかね。主婦と建築家と住宅なんかで打ち合わせして、大体建築家が負けてるじゃないですか。訴訟やなんかでもね、主婦の方が絶対情報量が多いんですよ。

村野さんは憧れの人とかそういう感じじゃなくて、村野はあくまでライバルなわけですよ。

西澤さんと村野さんの出会い

窪添 西澤さんは村野藤吾に対して、どうだったのですか。

若い頃の話はよくわからないんですけどね。接触はほとんどなかった。村野さんと西澤さんのコンタクトのきっかけを作ったのは僕なんです。直接会うきっかけを作ったのは、都市住宅という雑誌があって、外部の人が1号ずつ設計担当者になって作ろうというシリーズ⁷が1年ぐらい続いた。その頃私坂倉の所員だけど坂倉を売り込もうという感じだったけど、坂倉の人から見るとスタンドプレーに多分見えて、後で苦労するんです。そのとき、太田さん1冊作ってくれと都市住宅から言われたんです。だけど、ここで僕が出てたら何かあったらはしご外されるというのがあったんで、西澤さんを巻き込んでやろうということで、西澤太田で編集ならやらせてもらうと言った。編集者の植田実さんがいいですよと

ということで、実際に私がほとんど動いてるんです。西澤さんには原稿を書いていただくという形。そのときに、面白いから2冊続けてくれという話になりました。このシリーズに2冊続けた⁸のは西澤太田の編集だけなんですけどね。

二冊目の時に僕は目玉として、関西で庭だとか、建物だとかということをやっているという村野さん西澤さんなどで二人の座談会をやってもらってお膳立てをした。それで西澤さんは否応なく、村野さんは都市住宅の方で話つけて、二人が対談⁹することになった。1960年代の後半です。坂倉先生がまだ生きておられたときですからね。それで大江宏さんが設計した地下に庭がある和室の料亭¹⁰を会場に僕のアイディアで選んで、そこだと西澤さんから見ても、村野さんからいってもニュートラルな場所がいいんじゃないですかね。

西澤さん気を遣ってくれて、“太田くんも同席しませんか”という、“いやこれは僕がいると面白くないから、お二人でやってください”と。そのときは多分二人で初めてだった。で話をしてからね、結構西澤さん、村野さんの悪口言わなくなった。好きになったね。なかなかの人だという話になってね。というのが二人の出会いです。

窪添 僕が気になったのは新高輪ホテル（グランドセントラルホテル新高輪 1982 年）が村野でやったときに、品川のホテル（ホテルパシフィック東京 1971 年）を坂倉がやって、西澤さんがあの建築の紹介を僕が書きたいと編集に言って、西澤さんがこの新高輪の文章¹¹を書いている。何でそういうことになったのか西澤さんと村野さんが繋がる印象がなかったんでね。

全然繋がってないです。品川のホテルは、うちが関係ししたのは、鉄骨が上

がってからなんです。それまで、鹿島の設計施工でやってた。だれかがこれはあかんからということで坂倉に持ってきた。それで、坂倉はへの字型になる、それからやりだしたんですけどね。ある意味では難波球場と似てるわけです。

あのホテルは僕あんまり良くない思っていて、西澤さんもこれは駄目だということで、庭だけ一生懸命やってもらったんです。

というような経緯があった。そのとき村野さんとの初めての出会いだった。それ以降は庭を通じてお互いに何となく敬意を表し合っているみたいな感じがあったと思いますね。西澤さんは僕にはよく村野さんの話をしていたよ。

近鉄上六ターミナルビルの時

上六のときも僕は一つの提案をして、それは阿倍野ハルカスみたいなのを建てる案を作ったわけです。多分、ハンコックセンターの様ないろんなものが入った超高層で、（アーキテクチャル）フォーラムか何かの雑誌のレビューを見て知ってたんだと思いますが、それにデパートからオフィスビルからホテルから全部入れる提案をしようというスケッチをした。

北村（脩一）さんは非常にオーソドックスな形で、今の村野案のような。普通にやるとあなるわけです。北村さんが“太田くん、こんな建物が建つと思うの”と、60年代の話ですからね。僕はよっぽど“北村さんせめて違う形で足跡を残そうよ”とまでは言わなかったですけど、そういう計画をしてたんです。残念でしたね。

はなから近鉄に対しては、坂倉は二番手意識みたいなものがあって、村野さんは有井（近鉄の建築部長）さんとか絡めてズルズルと近鉄に攻めていく。大きな組織はみんな営業マンがたくさんいるから

クライアントとかそういうお付き合いになっていくんでしょうけど、そういうの僕は不愉快な感じがしましてね、古い人間なもので、腕でこいみたいな形で勝負すべきだみたいな。

近鉄モダンハウジング・ショウでの話

近鉄モダンハウジング・ショウ¹²というのをやったことがあるんです。1960 年前半ですけどね。今の登美ヶ丘の高級住宅、池の周りに 300 坪ぐらいの敷地の家を張り巡らせるイベントがありまして、小川さんという大阪の建築士会で有名な人が取り仕切ってました。

そのときはもう山崎(泰孝)くんやら、東(孝光)さんはいた。まだ二人とも坂倉歴が浅いんで、僕と浅野(雅彦)さんって話になってね。上は小川吉之助がいて、図面書くだけなんでということでやって、それにはもちろん村野さんも入ってたんですけどね。結局、二棟建てるのが各事務所一軒になって、僕だけが設計して浅野さんは逃げた。それは下の方が大体ババ掴む、どこの社会でもそういうこと。

大々的に小川吉之助が東京の方のマスコミに宣伝して取材に来たけど、ろくでもない建物だということで取材しなかった。新建築が一回だけ取材¹³してくれた。それは、僕が担当した段々状の住宅というやつで、傾斜地に段々状に家を設計するという形ですごく斬新なアイディアですよ。しかも全部 3m660 モジュールで割り付けてできたわけで、坂倉のだけ取材してくれて、建築文化¹⁴は登美ヶ丘全体がレベルが高くて取材できると思ってたらしくて、坂倉以外に日建さんと、それから横河さんがいい仕事をしておられて日建、横河、坂倉が建てたやつを取材してくれた。ただ雑誌社はそれなりに商売してるから、ページ割は坂倉は 3 ページ半、日建は 1 ページ半、横河は 1 ページ

にされる、すごく冷酷なもんだった。村野さんは無視された。村野さんすごいのは、すごく悔しかったし未練があった。村野の作品集の 2 巻¹⁵に、それと同じテーマの同じような住宅を、2 ページだけ出してます。よっぽど悔しかったなと思った。あの執念というのはすごい。彼はアーキテクトなんだと感心したんですけどね。

ただ、村野藤吾の研究なんていろんな人がやってるけど、それに注目してる人は誰もいない。研究者の研究と、設計者が見る目と全然違う。松隈(洋)さんなんかでもそういう話するんだけど、研究者ってのはトータルで見れないんですよ。

坂倉事務所のコートハウス

坂倉のコートハウスは、それまでの坂倉の住宅と全然違う形で、浅野(雅彦)さんと私とが作ったコートハウスなんです。西澤さんあんまり関係しておられないんです。

コートハウスの話になると西澤さんは総論で喋りたくて腰が引けちゃうわけ。西澤さんは浅野さんと僕たちに住宅やつてもらわんとこなすことができないけども、西澤さんなりにこれはという仕事は違う人にやらせたい気持ちがあるわけで。これはひがみでも何でもなく、好川さんが大きな家やったり、東さんが西澤さんの思うようにできる感じの、長いお付き合いのあった牛谷さんの家をやったりということで、結構その仕事には直接口を挟まないんだけど、担当者を決めるのは、西澤さんうまくやってた。下にとってはありがたいという感じがありました。なかなか面白い形で大阪事務所ですって仕事をしてきたなという話。

ちっちゃな事務所が頑張る

高島屋については、そんなことで長い間、仕事をさしていただいたんですが、

結局個人の事務所と、大きな組織で仕事をしようというところでは、最後の方は決定的にかみ合わなくなりましたね。組織対組織ということで、坂倉が弾き飛ばされてしまったという感じがあります。ある意味でちっちゃな事務所は弾き飛ばされる歴史みたいな感じ。

それでも、中之島の公会堂の頃(1999年着工 2002年完了)まではまだ小さな事務所が頑張ってたんです。それが証拠に、これ僕の得意な話であんまりしてないんですが、中之島の公会堂のプロポーザルが出た時に、関西で五つの、大きなプロポーザルが出たんです。南から、①国連の身障者 10 年記念の泉北ニュータウンにある施設(ビッグアイ)。②BK(NHK 大阪放送局のコールサイン JOBK に由来)と大阪博物館の合体の大手前の仕事と、③(中の島の国立)国際美術館、それから④大阪市中央公会堂と、⑤京都の国立博物館。

五つを、どういう形で取ったかを見てみますと。僕は坂倉は個人事務所と固く信じてるわけですけど、個人事務所が坂倉④とそれから谷口さん⑤が取って。組織事務所の日本設計とシーザペリのチームで、NHKの建物②。それから日建が国連記念①。あとシーザペリが単独で中之島の国際美術館③。あの頃までが最後の個人事務所の頑張りで、もうあとは駄目になりましたね。

それは国の方針があの頃変わった。五つ同じような事例を挙げなさいというのがプロポーザルの基本条件にあるわけだ。五つの実績というのがね、個人事務所では絶対出てこない。それで、その頃建設省の大臣官房の営繕部長とお付き合いがあったもんで、もちろん仕事を通じてのお付き合いです。その方なんか建設省の中では、やっぱり個人事務所に任せられないところもあって、大手と個人とが組んでやりなさいというような形を、建設省の大臣官房のほうでは考えておら

れる。それ以降はジョイントでやるやり方をプロポーザルで舵切ってきて、ちっちゃい事務所は独自ではやりにくくなってきた。最近はジョイントで形を揃えよみたいな時代になってる気がしますね。

大阪府庁コンペのとき (1989年4月黒川紀章が最優秀案に選ばれた)

窪添 その時期のコンペで言うと大阪府庁はちょっとまた違う。

大阪府庁は 80 年代の最後です。東畑と日建と菊竹と黒川と坂倉で五社でしたかね。

窪添 僕らは菊竹事務所と黒川事務所は個人事務所で、坂倉事務所は設計会社の感じで見てました。

いやそういうふうに思われないように努力をした。黒川さんや菊竹さんは、坂倉はアトリエ事務所だと思ってくれてたんです。面白いのは二人がね、たまたま会合であって、僕と黒川、僕と菊竹だけという形で喋る機会があったんです。二人とも坂倉さんは何がすごいかってよく個人事務所で大阪支店作って支店が維持できてるなど。“僕んところは途中まで大阪支店出してるんですが、出して潰れてたりしてるので、潰れずに個人事務所でやってる坂倉さんすごいな”って。菊竹さんはそれ以上喋らなかったよ。黒川さん私より一つ上で、それ以前にも世界デザイン会議 1960 までいろいろ出会いがあったりして歳が近い。“坂倉さんってすごいよなって、やっぱし弟子がいいのかな”“俺んところは最後俺が出ていかないと駄目だからしょうがないのかな”なんて言ってたけども。アトリエ事務所と彼らが思っていてくれたという話です。

南海球場の話

中西 南海球場はパースだとスロープで、上がっていくような感じです

が、実際そんな感じだったんですか。

実際に立ったのはパースとで全然違うものになるんですね。あのとき西澤さんが書いて¹⁶おられますけど、球場の前にこんな大きなグリルが付いてますよね。エレベーション、あれを現場でプレキャストコンクリートで作ったというのが一つ自慢でしたね。

スロープはあくまで一つの案で駄目になって、もう一つのプレキャストのプランニングは竹中の岩本さんがやった。坂倉は外側をやった。

井上(堯)さんはね、西澤さんと東大で同期で、大阪府に勤めていた。設計しだして積算をやるとか、ゼネコン決めるとかいう話になってくると、誰もできないわけです。井上さんが大阪府をやめたいみたいな感じで、それで引き抜いてきた。球場のときは、あんまりやってないと思うんだけど、グランドフロアの時は、井上さんが大成建設のネゴシエーションですごく活躍しているという話をしておられました。

Part3

パリでの人脈と戦後の坂倉の仕事

百合野 東京事務所でもターミナル、渋谷とか新宿とかやられてますよね。大きなもので複雑で、難しいものやられてましたけど、どのような関係の中で坂倉事務所の仕事になっていったのでしょうか。

あの頃は設計事務所っていうのはそんなになかったんですよ。それで、元々のきっかけは、南海高島屋さんの仕事がきっかけなんですけどね。それであの東京の仕事をやりだしてという形なんです。一つ表の話としては、南海の仕事を見て、ここなら複雑な仕事をまとめてくれ

るだろうということがあって東京の仕事をやりだしたんです。

それだけで仕事なんて決まるわけじゃないんで、もう一つ営業的な面から言いますと、坂倉事務所の仕事の中で営業的な動きをしてくれた小島威彦という方がおられましたね、有名な哲学者ですよ。中公文庫に入ってます。物語「京都学派」知識人たちの友情と葛藤¹⁷という本の中に、和辻哲郎とか、いろんな人が出てくる。一章を割いてこの小島威彦の話を、その本の中に書いておられます。彼は、すごい人脈を戦前から戦争中持っていましたね。奥さんに左近司海軍中将の妹さんを小島さんがもらった。戦時中、そのコネですぐいぶん活躍したけど、そのときに東急だとか南海のトップの連中と繋がりができて、彼がかなり動いてくれたと思います間違いなく。

坂倉さんと小島さんはパリで知り合った。外国で知り合うと、全然畑違いの人が仲良くなってという事例があって、それが日本に帰ってきてからも尾を引いて、あまり面白くない人間関係を持ってる人が結構いるわけですよ。

歴史上有名な人としては白洲次郎なんかがそうですね。結構、胡散臭い人脈を持っている。小島威彦さんは胡散臭くないんですけど、坂倉事務所の営業マンみたいな形で動いてくれた。

左近司さんは戦犯にもなってません。彼は統制派だったもんで官邸から追い出されて、戦前に予備役になってるわけです。かなり行政手腕のあった方みたい。予備役になってから商工大臣とか、統制関係の大臣になって、幅を利かせてた。左近司（左近司政三 1879-1969 海軍中将）さんと左近允（左近允尚正 1890-1948 海軍中将 BC 級戦犯として絞首刑）さんと二人いてどっちも海軍でね。その左近司人脈というのが結構坂倉の話の中で、小島さんが営業的に動いてくれる。なんで

坂倉というと、結局パリの人脈。小島さん自身は戦前の大物とのお付き合いで、戦争直後は復興するとか何かあったって監獄に長い間入った人なんて何も知らないで、前の人が衣を変えて、復興するわけですよね。

西条八十の青い山脈の“ふるい上着よさようなら”って、皮肉っぽいうまい歌だと思うんだけど。だけどそういう人は全部結局追い出されていくわけですよ。新しい人になる中で、それは日本としてもそういう下克上があったと思う。それぞれの会社としてもそういう下克上があって、戦後ができていくわけですが、そういう戦後の中で、小島さんとの関係の人脈ってのは、坂倉は追い出されて行かざるを得ない方のお付き合いになってしまうわけです。いろんな会社でも同じ事があって、それぞれの方と戦後の関係を作っていくという形になるわけです。

パリのお付き合いの中で高島屋さんの中で川勝(堅一)¹⁸さんという方がおられましてね。上田さんの前が川勝さん。川勝さんと坂倉さんとは、パリの万博のときのお付き合いで、中の出品物を高島屋さんが扱われたみたいです。そのときに川勝さんと坂倉さんとか知り合いになって、それがずっと戦後もご縁が続いて、たまたま高島屋さんは店子ですけど、南海との関係は、左近司中将の関係で小島さんからだろうと思います。そんな関係で、コネがついてということです。

出来上がってみたら、高島屋ビルのグランドフロアっていうのは、あの時としては本当によくできていた。大胆にやるという、それは坂倉の知恵じゃなくて、オーナーサイドの知恵ですが、それを上手く具現化した。結局建築家が提供できるのは技術力なんです。それをうまくやったんで、東急の仕事をさせていただけたんだろうと思います。

5 月例会バーナー



写真-2 座談会での太田御夫妻

エピローグ

会館と名が付く建物は・・・

今日の話は終わりですけど、会館と名がつく建物はみんな不幸なんです。日本の会館にはいい時がなかったんです。戦前は会館はないんです。会館ってのは中国語なんです。そんなこと言ったら漢字は全部中国語じゃないかということになるんだけど。明治以降になって日本語になった言葉なんです。新しい明治以降の概念で初めて会館という概念が日本人にも理解できた。ですから古い辞書を引いていただくと、会館というのは中国語であるという注釈がついてます。会館を日本人がつくるわけですから、結果的にみんな不幸になっている。また機会があればその辺の話¹⁹をさせていただきたいと思いますが、いろいろ日本の建築の歴史は面白いことがあります。 終

注記

- ¹ P2 藤木忠善の文章：
藤木は1964年に退所している。
Lixil eye No.4(2014.2)p33 —
「特集鼎談・新時代に挑戦した先
駆者」に藤木が退所する動機とタ
イミングについて語っているが、
太田氏御本人がこの部分を指して
話しているかは不明。
- ² P3 日経の記事で竹中錬一さんの話：
日経アーキテクチャー1980年3
月3日号
インタビュー 社長の品質まで問
われるTQCで“新工匠”めざす
デミング賞の竹中工務店 竹中錬
一氏が語る受賞のあとさきと思
われる。
- ³ P4 写真に写る蔵屋敷：
建築家坂倉準三展モダニズムを生
きる|人間、都市、空間 2009年
p66
建築家坂倉準三輝く都市をめざし
て 松隈洋著 青幻舎 2021年
p68
航空写真に高島屋大阪難波新館と
大阪スタジアムが映るが、これら
の写真では蔵屋敷は確認できず。
- ⁴ P5 高島屋のダンスホールの写真：
建築家坂倉準三輝く都市をめざし
て 松隈洋著 青幻舎 2021年
p68
- ⁵ P5 ニューブロードフロアーの写真：
建築家坂倉準三輝く都市をめざし
て 松隈洋著 青幻舎 2021年
p66
- ⁶ P6 太田隆信の大阪での住宅の仕事：
楠本邸(1961) 喜多邸(1962)と思
われる。
- ⁷ P9 都市住宅のシリーズ：
都市住宅 1972年から1973年の号
で特集
- ⁸ P10 都市住宅の坂倉事務所特集の二
冊：
都市住宅 1973年3月号と5月号
- ⁹ P10 村野・西澤の対談：
都市住宅 1973年5月号 緑・
人・自然—[対談・村野藤吾]
か？
- ¹⁰ P10 大江設計の料亭：
東京都中央区銀座にあった、「胡
蝶」大江宏設計 1969年 か？
新建築 1969年11月に掲載（未確
認）そうすると東京で対談が行わ
れたことになる。
- ¹¹ P10 新高輪プリンスホテル 村野藤吾
設計 西澤による評論：
新建築 1982年7月号に新高輪プリ
ンスホテルが掲載されている。西
澤による評論は未確認。
- ¹² P11 近鉄モダンハウジング・ショウ：
建築文化 1963年3月号には「登美
ヶ丘モデル・ハウジング・ショ
ウ」と記載
新建築 1963年6月号では「大阪府
建築士会10週(ママ)年記念モデ
ル・ハウジング・ショウ」と記載
- ¹³ P11 新建築：
1963年6月 ユニットプランの住
宅 p166-171
- ¹⁴ P11 建築文化 近鉄モダンリビングショ
ウの取材：
建築文化 1963年3月号p105に
「建売高級住宅の内蔵するもの」
に坂倉事務所、日建設計、彦谷建
築設計、横河工務所の各案が掲載
されている。
- ¹⁵ P11 村野藤吾の作品集2巻：村野藤吾
1964-1974 新建築社 1984年 p180-
183
野村不動産港南台モデルハウス
1973

¹⁶ P13 西澤文隆が書いている大阪球場について：
建築と社会 1950 年 11 月に詳しいが西澤文はない。
国際建築 1950 年 8 月号にも記載があるが筆者は不明

¹⁷ P13 物語「京都学派」知識人たちの友情と葛藤：
竹田篤司著 中公文庫 2012 年

¹⁸ P14 川勝堅一：
1892-1979 年高島屋の重役 戦前戦後を通じて民芸運動の河井寛次郎を支援した。そのコレクションが京都近代美術館の「川勝コレクション」となっている。

¹⁹ P14 その辺話：
建築と社会
2023 年 8 月号から 10 月号に
公会堂―余談ながら
2024 年 8 月号に
村の公会堂―続余談ながら
に関連論考が掲載されている。
2025 年 5 月、6 月に「先達に聞く
太田文隆氏のインタビュー」
の中にも関連する話をされている

座談会出席者

ナビゲーター 太田隆信 恵子 御夫妻
・吉岡昌一・下坂浩和・中西重裕
・窪添正昭・勝呂栄・石田俊二郎
・百合野耕治

おわりに

記憶も鮮明で自由奔放に語っていただいた 2 時間であった。座談会形式でのお話であったので太田氏の一方的見解という面もあろうかと思いますが、坂倉事務所での立ち位置や建築家としての矜持を感じさせる興味深い時間となった。

貴重なお話と思い記録として残しておきたい考え、文字起こしした原稿をご本人にお渡ししてあったが、無念にも本年 2 月(2025 年 2 月 23 日)に永眠され、校正原稿を受け取ることは叶わなかった。

一方、JIA 保存再生部会の中で何らかの形で公表すべきだとの意向がまとまったので、部会員の中で出来るだけ校正し、太田恵子氏(太田隆信氏夫人)と連絡を取りながら公表していく方針となった。ここに太田恵子氏の御協力と情報提供を感謝いたします。

今振り返るとあの熱い語り口は死期を悟りつつ人生を語りつくそうとする日々の日だったのかもしれない。一瞬ではあるが警咳に触れ得たことにあらためて感謝いたします。(記百合野耕治)

文章中の小見出し、目次の章立ては百合野が行いました。

注記は太田恵子氏に情報提供を受けながら、部会員により整理しました。

ご意見ご指摘は JIA 近畿支部保存再生部会 代表百合野までご連絡頂ければ幸甚です。

メールアドレス

atelier100osaka@gmail.com